（様式７）　　平成２９年度　大学院派遣研修　研究報告書

派遣者番号	28S01	氏　名	川端　慶子
研究主題 ―副主題―	困難な課題に直面した小学校教師の選択 ―二元化戦略のその先に―		
派遣先	上越教育大学大学院	担当教官	赤坂　真二
所属校	品川区立後地小学校	校長	石出　浩朗

キーワード：二元化戦略　献身的教師像　教職アイデンティティ　課題回避　援助要請　支援の在り方

１　問題の所在と目的

「教師という仕事は、気苦労や自己犠牲も多いが、子供と接する喜びのあるやりがいのある仕事だ」という教職観を日本の教師の大多数がもっている[1)]。そして困難を乗り切り、「自分は教師としてやれている」という成功感覚に伴う教師としての誇り＝教職アイデンティティが、教師を内側から支えている[2)]。しかし、その教職アイデンティティの重要性や教師の仕事が本来もつ困難に対して、社会の理解や共感が希薄で、多くの教師が誇りを失い、苦悩している[3)]。

教職アイデンティティは、教師としての成功感覚に裏打ちされた「安定層」と、教職上の困難による教職観の揺らぎを意味する「撹乱層」が、それぞれ結び付くことなく相対的に切り離されたものとして存在している[4)]。では、教職アイデンティティを確保するために、教師はどのように対処してきたのだろうか。

1970 年代前半まで、教師は努力することによって困難に応じる「献身的教師像」を子供・親・地域と共有することで信頼と権威を獲得し、社会的に承認されることを通して課題に対処し、教職アイデンティティを確保していた[5)]。しかし、1970 年代以降、学校の荒廃やいじめ問題が表面化し、学校への信頼が低くなった。近年、個人化が進み、学校現場で教師個人が陥った困難や苦悩を「その個人に帰責する」見方があり[6)]、これまでの対処方法がうまく機能しないばかりか、逆に「献身的教師像」が教師としてのアイデンティティを追い詰めている[7)]。

そうした中、久冨ら（先述）の行った調査において分析者長谷川は、日本の教師たちは、教職を遂行する中で様々な困難に出合い、一時的に教職アイデンティティが撹乱されたとしても、それらの体験を意識の中に築いた囲いの中で、「自分にはどうしようもない」と受け止めることでアイデンティティ安定の揺らぎに直結しないように防御する「二元化戦略」をとっていることを明らかにした[8)]。

「二元化戦略」は、自分も同僚も子供たちもすぐには追い詰めず、性急な成果を求めない[9)]。しかし、「二元化戦略」による防御は、改善の余地のある状況に対しても「こんなものだ」と是認してしまい、やり方を柔軟に変化させていくことを妨げ、既存の行動様式に固執させることにつながり得る[10)]。つまり、課題解決型ではなく、課題重要性回避型であると言える[11)]。では、「献身的教師像」は教師たちの中から消えてしまったのだろうか。久冨は、今なお教師たちは「献身的教師像」を内面に保持し，献身的教師像から「二元化戦略」に移行しながらも消えたわけではないと、アンケート調査結果から明らかにしている[12)]。

本研究では、インタビューや自由記述を用いて可能な限り実態に沿って、「二元化戦略」を選択した教師たちが、どのようなプロセスを経て、どのような理由で自分にはどうしようもない課題として線引きしたのかを明らかにする。

さらに、「献身的教師像」を内面に保持している教師たちが、「二元化戦略」を選択し、課題回避したままなのかを明らかにすることを研究の目的とする。

２　研究の内容・研究の方法

	アンケート調査	インタビュー調査
名称	「小学校教師の課題解決のプロセスと教職アイデンティティの関連についての調査」	「二元化戦略選択場面とその理由」
対象者	公立小学校教師（講師含む）	アンケートで「二元化戦略」を選択した公立小学校教師
時期	2017年8月1日～12月22日	2017年9月21日～9月25日
方法	郵送・直接依頼	対面式の半構造化インタビュー
回答数	99部	７名

３　研究の結果と考察

「二元化戦略」を選択する前に献身的に課題解決に当たり、それでも解決に至らない場合に「仕事の立場上」「考え方が違い平行線だから」「精神的に辛くなるから」「力量不足だから」の四つの理由で課題に線引きし、「二元化戦略」を選択するというプロセスが明らかになった。また、「献身的教師像」を内面に保持している教師たちは、個人としては「二元化戦略」を選択し、課題回避したが、最終的な課題解決を諦めていなかった。自分の力量不足を認め、「二元化戦略」を選択した教師たちは、その後、同僚・管理職に援助要請し、協働で解決に向かうことが明らかになった。援助要請に至る前の課題回避には二つのタイプがあり、自分の力量だけでは解決できないと積極的に課題回避して協働での課題解決に向かうタイプと、できる限り手を尽くし、どうしようもなくなって仕方なく消極的に課題回避して協働での解決に向かうタイプである。

４　今後の展望

調査結果から、個人での課題解決から協働での課題解決に至るプロセスには、二つの壁が存在していると考えられる。一つは、「本当はもっと手厚く指導したいですよね」と献身的教師像と「二元化戦略」との間で悩む若い教師の声のように、「献身的教師像」から「二元化戦略」への壁を乗り越えられず、先に進めなくなることである。

二つ目は、渋々「二元化戦略」を選択した消極的回避タイプの教師がぶつかる壁である。「自分の力で解決して自信をつけたい。周りも忙しそうで迷惑をかけられない。」などの理由から援助要請できないでいることである。このようなときは、「自分の力だけで解決することには限界がある」「一人でできることなどほとんどない」ことを知り、思い切って周りに援助要請することである。

また，若い教師に対して周りの教師が肯定的に評価したり、課題を広い視野で捉え直したりすることで関係性が良好となり、若い教師はより援助要請しやすくなるのではないだろうか。

引用文献

1）久冨善之:「日本の教師,その12章　困難から希望への途を求めて」,新日本出版,2017　　2）前掲1）
3）久富善之:「転換期にある教師像-献身的教師像を超えてー」『BERD』14,ベネッセ教育総合研究所,2008
4）山田哲也・長谷川裕:「教員文化とその変容」『教育社会学研究』86,2010　　5）久富善之:「教員文化の日本的特性」,多賀出版,2003
6）前掲4）　7）同僚　制度的制約によるもの
8）久富善之:「教師の専門性とアイデンティティ」,頸草書房,2008
9）前掲8）　10）前掲8）　11）前掲8）　12)前掲1）

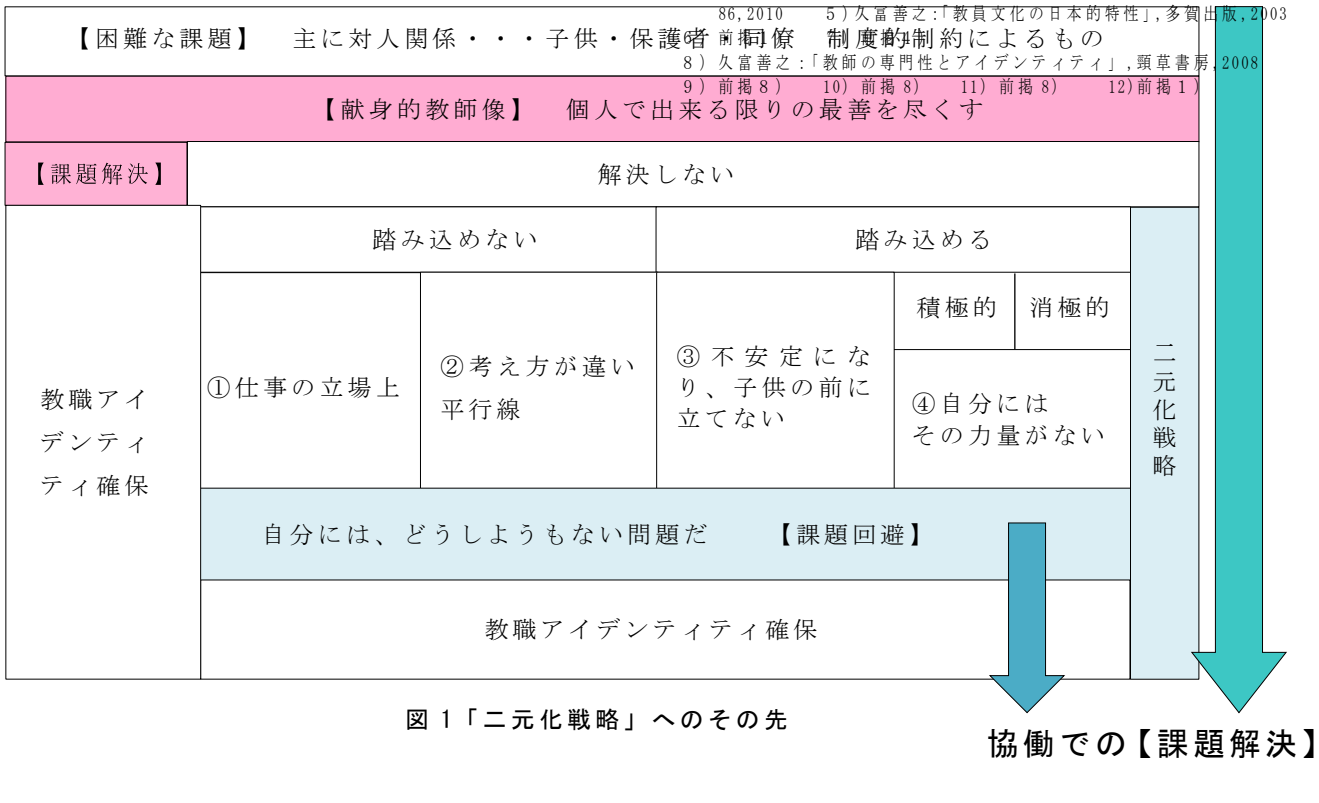

図１「二元化戦略」へのその先